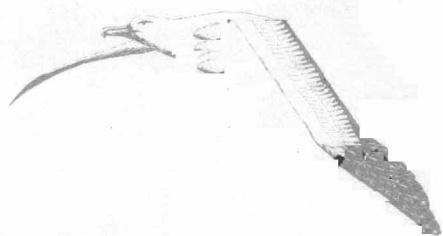




私説博物誌



筒井



毎日新聞社

私説博物誌

筒井康隆

1976年5月30日 第1刷

¥1200.

1976年6月30日 第3刷

編集人＝桑原隆次郎

発行人＝伊 奈 一 男

発行所＝毎日新聞社

☎100 東京都千代田区一ツ橋

☎530 大阪市北区堂島上

☎802 北九州市小倉北区紺屋町

☎450 名古屋市中村区堀内町

装 丁＝*Katsuhiko Abiko*

カ ッ ト＝*Yuhuke Ohtake*

印 刷＝*Tokyo Bell Printing*

製 本＝*Ohguchi Binding*

©Yasutaka Tsumi, 1976.

0095-500325-7904

イボイノシシ	5
コモリガエル	10
アズマヤツクリ	15
ワニ	20
ヤドリギ	25
アシカ	30
グンカンドリ	35
ミズグモ	40
フウセンウナギ	45
シリコニイ	50
フタゴムシ	55
ハンミョウ	60
ユーカリ	65

目次

イナゴ	70
グアナコ	75
ボネリア	80
センザンコウ	85
キュウケツコウモリ	90
モア	95
トリフィド	100
リュウグウノオトヒメノ	105
モトユイノキリハズシ	
クズリ	110
トビケラ	115
キュウカンチヨウ	120
ボウリユウ	125

ワ ラ イ カ ワ セ ミ	カ メ レ オ ン	ア カ ウ ア カ リ	ホ ウ セ ン カ	ホ オ ジ ロ ザ メ	イ ソ ー ド ン	リ ン ゴ マ イ マ イ	デ ン キ ウ ナ ギ	ス イ セ ン	ア ホ ウ ド リ	タ ツ ノ オ ト シ ゴ	ナ マ ケ モ ノ	シ ヤ カ イ ハ タ オ リ ド リ
190	185	180	175	170	165	160	155	150	145	140	135	130

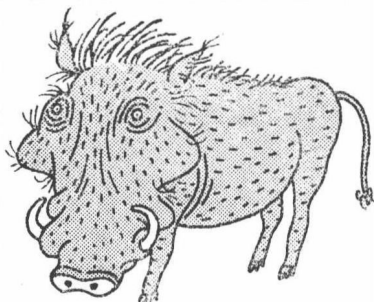
〈目 次〉

ヒ ト	カ ッ パ	タ ラン チ ユ ラ	ス キ ア シ ガ エ ル	ミ チ バ シ リ	テ ン グ ノ ム ギ メ シ	ジ ョ ウ チ ユ ウ	コ バ ン ザ メ	イ ス カ	ス カ ン ク	マ ツ タ ケ	ツ パ イ
250	245	240	235	230	225	220	215	210	205	200	195

私説
博物誌

『毎日新聞』連載（昭和五十年二月～昭和五十一年一月）

イボイノシシ



この凶悪な面がまえをしたイボイノシシは、英名をワートホッグ (Wart-hog) という。wart にはコブという意味もあり、動物学者の父の意見では、コブイノシシという方が正確ではないかということである。

こいつを最初に見たのは、戦後まだいぶ経ってからである。どこの動物園でお眼にかかったのか、たしかな記憶がない。上野動物園か天王寺動物園のどちらかであろう。

閉園まぎわだったため、見物人はもうほとんどいなかった。イボイノシシは比較的大きな獣舎に入れられ、ぼくが前を通りかかった時はたまたま金網のすぐ近くまで出てきていて、餌をあさるでもなく、横たわるでもなく、ただ一匹、ぼんやりとした様子で佇んでいた。

肩高五、六〇センチほどのからだには似合わぬ大きな顔をしていて、その縦長の顔にコブだかイボだかをぼかりぼかりくつつけた、見るからに憎ににくいやつである。

「でかい顔、してやがるなあ」

そんなことをつぶやきながらぼくは顔をあげ、金網にくくりつけてある注意書きの札を読んだ。

『臆病な動物ですから、おどかさないでください』

外見からは、ちょっと信じられなかった。

「へええ。こいつ、臆病なのか」

ぼくはあたりを見まわした。見物人は遠くにいる二、三人だけである。

手摺りから身をのり出し、ぱんと手を叩くと同時に、思いきり大きな声でぼくはワッと叫んだ。

イボイノシシは、へたへたと腰を抜かした。一瞬、さっと顔色が蒼白になったようだったが、これはぼくの気のせいであろう。四肢の力が抜けたらしく、くたくたくた、という感じでその場にはいつくばってしまったのである。

それほど極端な反応を示すとは思っていなかったの、むしろこちらが驚き、ははあこれはこれとは思いながら見ていると、彼はやがて後肢だけをまっすぐにし、つまり尻を勃立てた姿勢で、前肢だけはあいかわらず手前の方へ折り曲げたまま、がくがく身をゆすりながら方向転換して、地べたを這うようにぼくから遠ざかっていった。

あとで父から聞いた話では、前肢を手前へ折り曲げたまま歩くのは、イボイノシシがしばしばやる奇妙な習性であって、特に腰を抜かした時だけにやるとは限らないということであった。

このイボイノシシの原産地はアフリカである。サハラ以南に分布し、サバンナに住んでいる。雄の方は独身主義で、交尾期以外は単独で生活するというが、これが臆病な性格と関係があるのかどうか、そこまではわからない。人間でも、ふてぶてしい面がまえをした男に案外恐妻家が多いから、あるいはそれかもしれないと想像してみたが、よく考えてみたらイボイノシシの場合は雌の方だって同じ顔をしているのである。よく考えなくてもそうだが。

雌の方は一度に二匹から七匹の仔を産み、群れて歩く。つまりイボイノシシの群れというのはすべて母親と子供たちである。他のイノシシの子供には縞模様があるが、このイボイノシシの仔にはない。

ぼくが動物園で見たのは比較的小さいやつで、ふつうは肩高七〇センチぐらいだそうである。

それ以外の習性や食っているものなどは、他のイノシシと同じである。天敵はライオンとかヒョウとか、イヌ科のリカオンという動物。

イボイノシシのあの凶悪な顔つきは、ぼくが想像するのに、どうも彼自身の臆病さに関係があるのではないだろうか。たとえば彼が、だしぬけに他の動物とどこかで出くわしたとする。天敵以外の動物なら、あの顔を見ればこそそそ逃げ出すであらう。たとえ、突然出くわしたショックでイボイノシシが腰を抜かしたとしても、彼に出会った動物にしてみれば、イボイノシシが腰を抜かしているかどうかはよくわからないわけであって、ただ顔を見ただけでこいつは凶暴なやつに違いないと判断し、敬遠するわけである。つまり動物学という擬勢とか虚勢とかいわれているものの一種ではないかと、ぼくは思うのだ。

たとえばイモムシのからだにさわると、イモムシは背中から黄色いトゲのようなものを出し、刺すぞといわんばかりの様子をする。しかし、あのトゲのような突起は、別段なんの役にも立たない。あれと似たようなものではないかと思うのだ。

人間に置きかえていえば、心理学でいう補償とか、補償作用とかいったものに似ていてのではないか。もっとも、擬勢にしろ虚勢にしろ、また擬態であるとか保護色であるとか、そういった動物学上の解釈は、すべて人間が自分たちの社会を動物たちの社会にあてはめて考え出したものだから、いわば擬人的解釈であることが多く、疑問な点が多いとされている。

これに限らず、動物の世界と人間社会をアナロジイによって比較するというのは、過去の動物文学などが多く陥った悪弊であり、まして心理学用語などを持ち出し、その動物に似たある種の人間をあげつらうなどは、一応は科学者の家で育ち、科学的認識の何たるかもうすうすう心得ているべくであってみれば、よくないことであるくらい、ちゃんと知っている。それにもかかわらずやるといふのは無茶であるが、人間には無茶をやらなければならない局面もあり、そもそもぼくは動物学者でなくて作家だから、ぼくが博物誌をやる場合は、動植物にことよせて結局は人間を論じなければならぬので、これはどうもしかたがない。今後のこともあるから、ここでひとことおことわりしておくことにする。

心理学でいう補償作用は、たとえば頭が悪いとか、貧乏であるとか、からだに欠陥があるとかいった、

他人に比べて劣っている部分に劣等感を持ち、この欠点を克服したり、欠点の代償になるような行動をしたりすることである。この場合、その欠点というのが第三者の目から見ると他人よりも劣っているかどうかは問題ではない。実際はちっとも劣っていないのに、本人だけがそう思っている場合もある。

臆病であったり気が弱かったりした場合、本人はともすれば自分の性格を、社会生活に適していない悲しむべき性格であると考えてしまう。臆病な動物ほど頭がいいといわれるように、実は臆病さは知能の高い証拠であり、また気が弱いというのも一面から見れば気がやさしいということでもあるのだが、社会生活をしているうちにはそうした長所のために損をするという場合も何度かあり、本人は、これはもう自分の欠点に違いないと思ひこんでしまうのである。

そこで彼は、なんとかしてこの欠点を克服しようとする。教養をかなぐり捨ててわざと粗野に振舞ってみたり、武芸の腕を磨いたり、とてもかないそうもない強そうな相手に対して反抗したりする。

それでも克服できなかったり、あるいはそういう行為さえ恐ろしくてできないというやつは、代償行為にうつる。猛犬を飼ったり、ガードマンを雇ったり、強そうなやつを友人にしたり、トーチカみたいな家を建てたり、威圧的な態度や表情を身につけようとしたりする。

人間には理想我というものがある。他人を威圧できる人間になりたいと思っていると、次第に威圧的な顔つきになってくるし、危険人物だと思われたい願望があると、知らずしらずのうちに凶悪な面つきになってくる。これはたとえば外面如菩薩内心如夜叉の女性とか、腹黒いやつがしばしばとけ顔とか、えびす顔とかをしているのと似ているように思えるが、これらは理想我ではなく、どちらかといえば、自分の利益のためにそういう顔をしているわけであって、動物でいえばむしろ擬態に相当する。

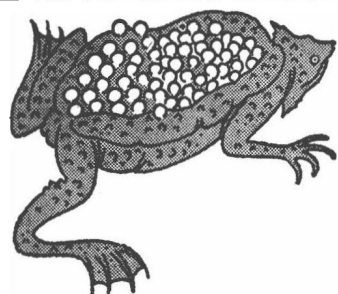
威圧的な、あるいは凶悪な顔というのは、内側のもろさをかくすための一種の甲羅とか殻とかである場合が多い。見かけは柔弱に見える人物が、意外に芯があったりすると、この場合は逆である。

存在それ自身が敵意を持たれる、という不幸な立場が人間社会にはある。たとえば資本家はすべて労働者の敵であるという小児病的な常識がある以上、社長とか重役とかは常に敵意の矢おもてに立たされているといえる。こういう立場の人が臆病であつたり気が弱かつたりすると、労働組合にはなめられ、社員たちは言うことをきかないから、けんめいに威圧的になろうとし、こういう人はたいの場合金をたくさん持っているため、ある程度それに成功する。つまり金のかかった服装ができるし、たくさん食べてよく肥り、威圧的な体格にもなれる。あとは態度や表情を研究すればよいのである。

社長室でふんぞり返り、満面に朱をそいだ鬼のような顔で相手を睨みつけ、最高級仕立ての背広に包まれた巨体でもって威圧し、割れんばかりの大声で部下を怒鳴りつけている人間は、そういった局面にいること自体がすでに腰を抜かす寸前にあるといえないだろうか。表面の固い甲羅とか殻とかが破れた時、中に温存されていた臆病さがいちどに噴き出すのではないか。

嘘と思ったら、いちど試してみればよろしい。こういう人物に近づいていき、耳もとで手をぱんと打ちならし、ワッと叫ぶのだ。彼はたちまちさつと顔を白くし、へたへたと腰を抜かして大きな椅子から落ち、デスクの向こうへはいつくばり、がくがくと身をふるわせながら、豪勢なカーペットの上を這うようにして、前肢だけを手前の方へ折り曲げたまま、よたよたと……。

コモリガエル



コモリガエルは、ピパ(Pipa)という名でも知られている、体長二〇センチくらいの、相当にでかいカエルである。南アメリカの、ギアナやブラジルにいて、これを生きたまま捕えて日本までつれてくるのは大変だろうから、現地へ行った人以外、直接このカエルを見た日本人は、あまりいないのではないだろうか。

どうしても一度見たいと思うので、ぼくは父に訊ねてみた。「日本の動物園には来ていないでしょうか」

「まあ、どこにも来ていないだろうなあ」と、父は言った。「よほどカエルの好きな人が、個人的に飼っているかもしれないが」

父がいう「カエルの好きな人」とは、この場合カエルの研究者とか、学者とかいった意味なのであろう。

このピパは、ご存じのように、雌が背中にあいたたくさんの穴の中で卵を孵化し、それが小さなカエルになるまで守り育てることによって有名である。いったい背中穴へ、雌が、自分の産んだ卵をどうやって入れるのだらうと思ひ、ちょっと調べてみたら、いろいろな説のあることがわかった。なぜそんなに説が定まっていなかったのかを想像するに、このピパは生殖時期になると、雨で水びたしになった森林の中へ深く入ってしまい、発見がきわめて困難になる。そのため観察もは

なはだ厄介なのであらう。

一説によれば、まず、雌の産んだ卵は塊になって、彼女の背中下部に添着する。雌はこれを持ちかまえていて、この卵の塊に精液をおちまけるなり何なりして、とにかく全部に受精させる。そののち、卵をひと粒ずつ押しあげて、彼女の背中のくぼみに押しこむのだそうで、カエルにしてはずいぶん知的な作業である。

ところがもう一説によれば、もっと知的になってくる。まず、雌が長い産卵管を出すのだそうである。そして雄がその産卵管の先端を彼女の背中に運ぶとある。口にくわえて運ぶのか、手で背中にかついで運ぶのかはわからないが、ちょうどヴァキューム・カーのおじさんがホースの先端をかついで汲取り口へやってくるようなスタイルでもあらうか。そして彼は、彼女の背中にひとつつ卵を産卵管から落としていくというのだが、このあたりはちようど、タコヤキを焼くときにあの鉄板のくぼみの中へ少しづつメリケン粉をたらし込んでいく要領であらうか。そういえばあのメリケン粉にも卵が混ざってある筈だが、まあそんなことはどうでもよろしい。とにかく、正確にひとつづつ落としていかなければならないのだから、とてもカエル風情のやることとは思えぬ知的作業ではないか。

どちらの説が正しいのかよくわからないが、ぼくとしては、記述が新しい上、雄のカエルの行為が風変わりであった方が面白いので、あとの方を信頼したい気分である。

背中の穴についても、産卵時期になるとしげんにくぼみができ、雄がその中へ卵を押しこむという説と、卵の付着した部分が次第にへこんで穴になるという説がある。

さて、彼女が保護する卵の数であるが、これはふつう六〇から七〇だという。これはたいへんな数であって、つまりそれだけの穴が彼女の背中にあいているという勘定になる。時には一二〇という数が記録されてもいるらしい。カエルの中でも特にからだの形が扁平だし、雌の背中は産卵期になると皮膚が肥厚するから、まあ、それだけの数の卵も平気で収容できるのであらうが、それでも彼女の背中の表面が蜂の巣

のような状態になることは確かである。

卵がおさまった穴の表面にはやがて膜ができる。穴に蓋をして卵を保護するためだ。この穴の中で卵はオタマジャクシになり、さらに四肢をそなえた小さなカエルにまで成長する。この期間は数週間である。子供のカエルは穴の蓋を突き破ったり食い破ったりして外へ出てくる。

ぼくは子供の頃、書斎へしのび込んで父の蔵書を見ているうち、このヒパの写真には何度も出くわした。外国の動物に関する文献はたいいてい洋書だから、字はまったく読めなかったが、写真はカラー写真も混じえていずれも豊富なので、充分面白かった。特にヒパの写真は、どれもこれも子供のカエルが今にも背中から出ようとする寸前のものが大写しになっているものばかりだったから、見るたびにずいぶん驚かされたものである。収録されている写真ではたいいてい、表面の膜はもう破れてしまい、たくさんの穴から仔ガエルの鼻さきがちよろりと出ていたり、肢がぬっと突き出ていたりして、奇妙というおうか不気味というおうか、見るたびになんともいぬ気持ちに襲われ、時には肌寒くさえなったものだ。

ぼくはやや人並み以上に擦ったがり屋であり、かゆみや痛みにもたいへん弱い。水虫の痛痒感にはいつも泣かされているし、背中、特に手がとどかぬあたりのかゆさにも往生することがある。だからヒパの写真を見ながら擬人的な想像をたくましくしたりすると、たちまち背中全体がかゆくてたまらなくなり、身をよじる。いかに背中の皮膚が肥厚しているとはいえ、全面に六〇から一二〇もの穴を穿たれ、その中で小動物にもぞもぞとうごめかれたなら、人間であればあまりのかゆさに発狂するのではないだろうか。もし自分の背中にそんな穴があり、卵を入れられ、それがオタマになり、いやオタマのうちならまだいいが、仔ガエルに成長した六〇ないし一二〇匹がそれぞれ四肢を突っ張ったり、膜を食い破ったりして動きまわりはじめた場合のことを考えると、わあとか叫び出したくなるほどである。

人間ならまだ、自分の手やかゆいところを掻きむしることもできるが、カエルのあの手ではちょっと無理であろう。ちよっとどころか駄目にきまっているので、読者諸氏もそろそろ背中がむずむずしてこられ

たと思うが、まあ、それはもちろんこっちもそういう効果をあたえようとして書いているわけだが、書いている方はもっとむずがゆく、ここまで書いてきて、ほんとにかゆくなってきた。あまりかゆいものだから、ぼくは今もじっと見つめているこの写真のピパの背中に爪を立ててばりばりと掻きむしってやりたいという衝動と幻想に駆られるのである。皮膚がはじけるように破れ、きつと血うみ状の脂肪が噴き出すだろうと思うが、一方そうされることは、もしかしたら失神するほどの恍惚感を彼女にもたらすのではないかという気もするのである。ほんとに、彼女は少しも憐れたくなないのであるか。

不思議なことはもうひとつある。穴の中に閉じこめられている期間、食物はどうするのだろうか。オタマジャクシの間は、他のカエルのオタマのように自分がその中から出てきたあのゼリー状の卵の殻を食べて生きていられるであろうが、それを食い尽くし、仔ガエルになった時は何を食べるのか。ぼくにはどうも、彼らが母親の肥厚した背中の肉を穴の内側からほじり返して食っているような気がしてならないのである。実際、食いものはそれ以外にはないか。そう考えると、またもや痛痒感がはげしく背中に蘇ってくるのであるが。

さらにまた、六〇ないし一二〇匹もの子供がいれば、そのうち一匹や二匹は穴の中で死ぬ場合もあると思うのだが、その死骸が腐敗して母体に影響をあたえることはないのだろうか。母親のからだまでが腐りはじめ、そのために彼女まで死んでしまうということはないだろうか。

心配になったので、父に確かめてみた。

「もし子供が穴の中で死んだら、その死骸はどうなりますか」

「おそらく母親が吸収するんじゃないかな」

と父は言った。

だが、やはり心配でならない。どうしても彼女のからだまで腐っていくような気がしてならないのだ。もしそうだとしたら、子供を育てるのいのちがけである。いや、腐ることはないにしても、そもそもそ

んなにたくさんさんの仔ガエルを背負っていて、もし天敵に発見された場合、逃げる動作だって鈍いだろうし、やはりいのちがけのたいへんな仕事であることに変わりはない筈だ。だからこそ生殖期間中は滅多に姿を見せないであろうが。

人間の場合は、子供の育てにくさということもあって、女性は一度に一人しか子供を産まない。ふた児、三つ児は稀である。ながい期間かかってたとえ一〇人産んだとしても、ピパの雌が一度に産む数の六分の一ないし十二分の一に過ぎない。もちろん、最近ではそんなにたくさん子供を産む女性は滅多にいない、四人産めば、たくさん産んだといわれる。昔に比べてますます子供を育てにくくなってきたためもあるが、現在、人口抑制、産児制限が問題になっているため、たくさん産むと教養がないだとか馬鹿だとかいわれるし、自分は動物的な本能の赴くままに子供を産んでいるのではないかと自己批判したりして、一種の罪悪感めいたものを抱かなければならない。

だが、その育児本能も、人間の場合のように人口過剰になってくると、自然のフィードバックによって次第に変化してくる。ピパの雌みたいに、自分のからだで子供を保護しようという本能はうすれ、むしろ個体としての自己保存本能の方が強くなり、子供を産むまいとしたり、産んだ子供を捨てようとしたりする。いのちがけの育児などもはや望むべくもない。つまり現代では、子供を捨てる女性ほど本能に忠実なのではないかとか、本能として未来的なのではないかとかすら思えてくる。よく、子供を捨てた若い母親を無知だとか、成熟していかいって非難しているが、女性はいかに、もともとたいへん若いうちから育児本能を持っていた筈である。無知であればあるほど本能に忠実だとも考えられるので、これはやはり、本能が失われたのではなく、本能が変化してきたと考えるべきではないだろうか。